

カンボジアでは首都のプノンペンを中心に開発が進んでいる。

写真はプノンペン郊外にあるゴミ山の様子である。

現在、このようなゴミ山の多くが開発計画の一貫で姿を消そうとしている。



ゴミ山がなくなると聞くとポジティブに感じるかもしれない。
しかし、そのゴミを生活資源として生きてきた、近辺のスラムに住む家族にとってはそんなことはない。
開発の為に、長年住んだ家からの退去を余儀なくされているのだ。



2014年6月撮影／カンボジア・プノンペン／撮影：村上彩



2014年6月撮影／カンボジア・プノンペン／撮影：村上彩

彼らは主に、ゴミを集め、ゴミを仕分けし、ゴミを使って生活を営んでいた。

写真はゴミを仕分けする父親と、それを手伝う子ども達の姿。



2014年6月撮影／カンボジア・プノンペン／撮影：村上彩



2014年6月撮影／カンボジア・プノンペン／撮影：村上彩

こちらは、ゴミ袋を縫い合わせて、それを売ることを仕事にしている女性の姿。
ゴミ山がなくなってしまうことにより、住む場所をなくすだけでなく、このような仕事を失う家族も多くいる。
右の写真は女性の家の横に保管されているゴミ袋の山。



2014年6月撮影／カンボジア・プノンペン／撮影：村上彩

現在、現地の NGO 等が彼らの為に土地を取得し、家を建てるなどの活動を行っているが、
未だに今後の生活手段、住む家が見つからない家族は数多くいる。
新しく住む場所が決まっている家族も、長年住んだ家や近所の人々との別れに、
複雑な思いを抱え、今後の生活に不安を持っている。

カンボジアで出会った家族は基本的に大家族で、子どもがたくさんいた。
そして、学校に通いたい、勉強をしたいと希望を語る子どもの姿が多く見られた。
彼女もその中のひとりである。

